

伝円珍筆三井寺切の放射性炭素年代と紙背『文選注』断簡の書写年代

Radiocarbon Age of Miidera-gire Attributed to Enchin and the Historical Period when an Ancient Monzen-chu Manuscript was Written

小田寛貴・安 裕明・池田和臣・坂本 稔

ODA Hiroataka, YASU Hiroaki, IKEDA Kazuomi and SAKAMOTO Minoru

- ①はじめに
- ②『文選』・『文選注』および三井寺切
- ③料紙および書跡
- ④¹⁴C年代測定
- ⑤考察

【論文要旨】

三井寺切は、料紙両面に異なる筆跡の書をもつ古筆切である。片面には草書で仏書が書かれており、もう片面には『李善注文選』の一部分が楷書で書かれている。草書の仏書は、円珍（智証大師）の手になるものとされており、平安時代の書風を持っている。料紙表面の状態と書跡とから判断すると、『李善注文選』側のほうが仏書よりも先に書かれたものであると判断できる。本研究では、この『李善注文選』が書写された年代を明らかにするべく加速器質量分析法による¹⁴C年代測定を行った。その結果、2σで666～776 [cal AD] という較正年代が得られ、この古筆切が奈良時代以前に書写された『李善注文選』写本の断簡であることが示された。現存する最古の『文選』写本は、平安鎌倉時代の残欠本であり、奈良時代では正倉院文書と平城宮跡出土木簡に一部分が書写されたものが残されているにすぎない。それゆえ、奈良時代以前の書写年代をもつ本古筆切は最古級の『文選』写本の断簡であることになる。

【キーワード】 三井寺切, 文選, 古筆切, 放射性炭素年代

①……………はじめに

古典文学の作品を国語学・文学・歴史学等の研究対象とする際には、その作品の正確な本文が必要となる。近世に入り版本という印刷物が一般化する以前、古典文学作品は書写されて伝えられるのが主流であった。しかしながら、書写には衍字・誤字・脱字、文章の錯簡などによる本文の変化がともなう。したがって、書写が繰り返されるに従い、本文は原典のそれから遠ざかってゆくことになる。そのため、原典もしくは原典に近い古い時代の写本が求められるのであるが、鎌倉時代以前の古写本が完本として残っていることは極めて稀である。その主な原因は、安土桃山時代以来の茶道の流行に求められる。すなわち、茶室で鑑賞する掛軸の題材として、古く流麗な筆跡で書かれた古写本が切り取られて、ときには表裏を剥いで利用されてきたためである。

これら古写本の断簡を古筆切とよぶ。また、不要になった古写本等の背面が別の写本や經典に再利用されることがあり、それが古筆切となっているものもある。紙面の両面に異なる筆跡の書をもった古筆切である。本研究において対象となる三井寺切とよばれる古筆切もその一例である。

江戸時代に入ると古筆切の収集が流行し、集めた古筆切を貼り並べたアルバム帖（古筆手鑑）が制作されるようになる。さらに、貼り並べる順序にも、最初に聖武天皇の書、次に光明皇后の書、次いで嵯峨天皇、檀林皇后の書といったように、一つの形式が作られるようになる。こうした、古筆切収集により、古写本の解体はさらに進行する。しかし、完本としては稀少であっても、古筆切という断簡としては鎌倉以前の古写本が大量に伝世していることになる。それゆえ、古筆切の史料的な価値は極めて高いはずである。しかし、掛軸や収集の需要に応えるべく作製された偽物や、その筆跡を手本とした写しも多く混在しているため、書写年代が不明のままでは、古筆切の史料としての価値は潜在的なものに過ぎない。

古文書や古記録の書写年代は、多くの場合、書跡史学・古文書学などの見地から求めることができる。しかしながら、古筆切という数行の書しかもたない史料には、確実な判定ができないことがある。古筆切とは、潜在的な価値をもちながらも、こうした固有の問題を有する史料である。本研究は、伝円珍筆三井寺切という古筆切の紙背に残されている『李善注文選』について、¹⁴C年代という自然科学的知見と用筆・字形といった書跡史学的知見とから、その書写年代を求めたものである。

②……………『文選』・『文選注』および三井寺切

『文選』は梁（502-557）の昭明太子（蕭統）（501-531）が東周（BC770-BC256）から梁に至る約1000年間の詩賦を編纂した30巻の書物である。唐代（618-907）には、『文選』の字句を考証し音・義を明らかにする文選学とよばれる学問分野が登場する。顯慶三（658）年に李善（?-690）が上進した『李善注文選』60巻をはじめとして、多くの学者によって様々な注が施され、無注本・李善注・五臣注・六臣注・文選集注等の諸本が存在する。現在広く知られているものは、嘉慶年間（1796-1820）に胡克家（1758-1817）が宋本を底本として重刻した『李善注文選』である。『文選』

の一部を手習いした木簡が平城宮跡から出土していることや、正倉院文書にも一部を書写したものがあることなどから、奈良時代には『文選』が日本に伝わっていたことがわかる〔東野, 1977a; 東野, 1977b〕。さらに『枕草子』(第200段)には、「ふみは文集文選新賦史記五帝本記願文表はかせの申文」とあることから、『文選』が『白氏文集』や『史記』とともに平安貴族の必読書とされていたことがわかる。『吉備大臣入唐絵巻』や『江談抄』では、入唐し楼閣に閉じ込められた吉備真備に玄宗皇帝が試練の課題として『文選』の解説をさせ、帰国に際して吉備真備が困碁・『野馬台詩』とともに日本へ持ち帰ったとしている。日本に現存する最古の『文選』本文として上記の奈良時代の二点を挙げるができるが、その後も現存する古写本は極めて少なく、九条本・上野本・観智院本・猿投神社本・大東急文庫本など平安鎌倉期の残欠本が知られるだけである。

三井寺切は、草書で書かれた仏書の古筆切であり、円珍(智証大師)(814-891)を伝承筆者とする。本研究において対象とした三井寺切は、縦27.3cm、横8.2cmであり、無界で天地一杯に一行26~29字で書写されている(図1)。円珍は、讃岐国那珂郡(香川県善通寺市)に生まれ、15歳で比叡山に登り初代天台座主義真に師事、仁寿3(853)~天安2(857)年に入唐し密教を学び、帰国後の貞観10(868)年に第五代天台座主になった人物である。天台宗寺門派の祖であり、貞観元(859)年に三井寺(園城寺)を再興したことで知られる。また、霊蓋というがった頭頂部をもつ異形の僧としても有名であり、唐に向かう航海で大風のため漂流するが、金剛不動明王の導きを得て無事入唐したという伝説が残されている。

極札とは古筆切の筆者を鑑定したものであるが、本研究の対象とした三井寺切に添付されている古筆了雪(1612-1675)による極札にも智証大師(円珍)とある。しかし、一般に、極札にある伝承筆者は必ずしも正しいものではないことが、書跡の面からも¹⁴C年代測定の結果からも知られている〔Oda et al., 2007〕。円珍筆という確証はないが、その書風から三井寺切の仏書は平安時代のものでされている〔例えば、古筆手鑑大成編集委員会, 1984a〕。

この三井寺切も草書で書かれた仏書であるが、その紙背には楷書で書かれた『李善注文選』の一部分が残されている(図2)。本文は一行14文字程度で書写されていることが推定され、注は割書で一行に20文字が書かれている。内容は、『李善注文選』巻一にある班固の西都賦である。

上述のように、『文選』は奈良時代には日本にもたらされ、平安貴族・鎌倉武士に

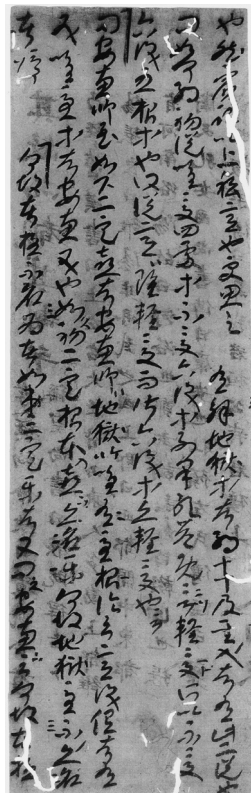


図1 伝円珍筆三井寺切

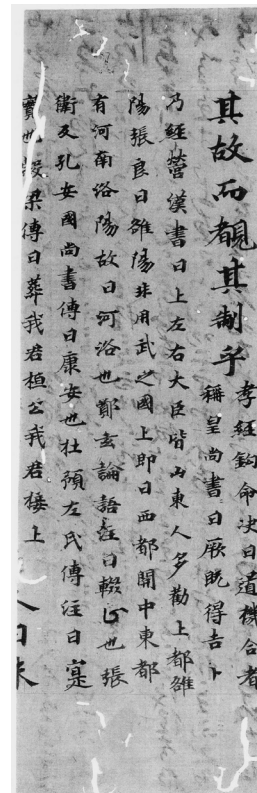


図2 伝円珍筆三井寺切紙背「文選注」断簡

も親しまれていながら、その写本は現存するものが少ない。それゆえ、この三井寺切の紙背に残されている『李善注文選』（以下、『文選注』）も年代によっては、断片とはいえ、『文選』原本の本文を知る上での貴重な史料となる。そこで、本研究では、書跡史的知見と¹⁴C年代測定とにもとづいて、この三井寺切・『文選注』断簡の書写年代を求めることを目的とした。

③……………料紙および書跡

本項では、料紙および書跡の面から、『文選注』の書写年代について考察する。

まず、本古筆切に仏書と『文選注』が書写された時期の前後関係について検討する。古筆切両面の料紙表面の状態を観察すると、『文選注』側は、叩くことで表面を平坦にする加工がなされており、書写に適した紙面であったことがうかがえる。一方の、三井寺切（草書仏書）側の表面はややけぼだっており、調整が加えられたものではないことがうかがえる。すなわち、料紙表面の状態から判断するに、『文選注』側が書写をすべき表側であり、三井寺切はその裏面を利用して書かれたものであると考えるのが自然である。また、三井寺切の書跡は、製紙されてから時間のたった古い紙に水分の多い墨を用いて書かれたものであるように見られる。特に楮紙の場合は、長期間保存されることにより、料紙表面の吸水性が失われて筆書に適さなくなる、いわゆる「風邪をひく」という現象が見られる。こうした古い楮紙に書写する場合、水分の多い墨を用いるか、一筆で数文字程度しか書けないため、頻繁に墨の付け替えが行われることになる。三井寺切の筆跡は、この書が古い紙に書かれたものであることを示している。一方の『文選注』側にはこうした特徴は見られず、その自然な筆跡から判断すると、風邪を引く前の紙に書写されたものと考えることができる。紙面の状態と筆跡とから、『文選注』側が書かれて後、「風邪をひく」程度の時間が経過した後、その背面を利用して三井寺切が書写されたことが料紙表面と書跡からうかがえる。

次に、この古筆切に残された『文選注』の書跡の特徴について述べる。『文選注』側の一文字目「其」を図3に拡大して表示した。この「其」の三画目にあたる縦画をみると、左下から筆が入り、あらためて左上から起筆し直し、下方へ引くという書き方をしていることがわかる。また、六画目の横画では最後に筆が上に跳ね上げられて終わっている。この左下から起筆した縦画および終筆を上方へ跳ね上げる横画を持った文字がこの『文選注』には散見される。こうした特異な筆法は、世説新書卷六・王勃集などの唐代の抄本に見られるものである。また「商」部を「商」とする「適」という文字をはじめ、「制」・「承」などの字体も唐抄本と共通するものが用いられている[安, 2007]。

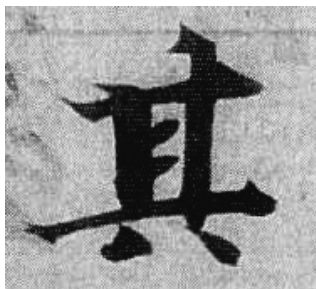


図3 紙背『文選注』断簡
一文字目の「其」

書跡の面からは、この『文選注』は唐代もしくは奈良時代に書写されたものであるか、もしくは唐抄本を写したものであると判断することができる。しかも、後世の写本であるにしても、さらに後に書かれた仏書が平安時代の書であることから、この『文選注』本文は平安時代以前に書写されたものであるということができる。

④……………¹⁴C年代測定

料紙および書跡の面から、『文選注』本文が奈良もしくは平安時代のものであると考えられるが、自然科学的な面からもこの伝円珍筆三井寺切紙背『文選注』断簡を眺めるべく加速器質量分析法による¹⁴C年代測定を行った。

本研究において年代測定に供した試料は計4点である(表1)。一点は、上述の伝円珍筆三井寺切紙背『文選注』断簡(Sample No. 1)であり、他の三点は、結果を比較すべく測定した奈良時代書写の古写経切(Sample No. 2~4)である。

Sample No. 2, 3はともに天平期(729-749頃)に書写された経典の断簡である。Sample No. 2は大般若経巻426, No. 3は華嚴経が書写された経切である。特に後者は紺紙に銀字で書かれた装飾経であり、代表的な天平経である。東大寺二月堂に伝来した華嚴経(60巻本, 東大寺には2巻が現存する)の断簡であり、寛文7(1667)年の二月堂の火災に際し天地に焼け焦げが生じたため二月堂焼経といわれる。天平16(744)年に東大寺で行われた華嚴会に供されたものと考えられている。

Sample No. 4は魚養経ないし薬師寺経とよばれる大般若経の断簡であり、朝野魚養が伝承筆者とされている。生没年は不詳であるが、朝野魚養は奈良末期から平安初期(桓武朝)の官僚であり、787年に外従五位下, 788年に播磨国大掾・典薬頭となっている。『宇治拾遺物語』(第178話)には中国渡来の能筆家、『本朝能書伝(巻上)』には吉備真備(695?-775)の子として描かれている。ただし、魚養経は朝野魚養の真筆ではなく、宝亀元(770)年前後に東大寺奉写一切経所において複数の写経生によって書写されたものである。

これら古筆切・古写経切の余白部分から数mgの紙片を採取し試料とした。Sample No. 1およびNo. 3については、裏打紙が施されていたため蒸留水中にて剝離した。次いで、蒸留水中にて超音波洗浄を行った。これらを1.2N HCl(60℃, 2h×5回), 1.2N NaOH(60℃, 2h×5回), 1.2N HCl(60℃, 1h×3回)での交互洗浄に供した。蒸留水中での洗浄後、真空デシケーター中にて乾燥させた。これら試料からのグラファイト合成とCompact-AMS(アメリカNEC社製1.5SDH)による¹⁴C年代測定を(株)パレオ・ラボに依頼した。測定された¹⁴C年代はINTCAL04[Reimer et al., 2004]によって較正年代に換算した。得られた結果を表2に示した。

表1 古筆切資料一覧

Sample No.	名称	書写年代
1	伝円珍筆三井寺切紙背『文選注』断簡	—
2	天平経(大般若経巻426)断簡	天平期(729-749頃)
3	二月堂焼経(華嚴経)断簡	天平16(744)年頃
4	伝朝野魚養筆大般若経(魚養経・薬師寺経)切	宝亀元(770)年頃

表2 ^{14}C 年代測定の結果

Sample No.	^{14}C 年代 [BP] ¹⁾	較正年代 [cal AD] ²⁾	Lab. No.
1	1281 ± 23 ± 45	678 (690) 724, 739 (751, 762) 771 666 (690, 751, 762) 776	PLD-11909
2	1283 ± 23 ± 45	676 (689) 722, 740 (752, 761) 770 666 (689, 752, 761) 776	PLD-11917
3	1271 ± 22 ± 43	684 (709, 747, 766) 772 670 (709, 747, 766) 777	PLD-11878
4	1281 ± 22 ± 43	678 (690) 723, 740 (751, 762) 770 667 (680, 751, 762) 776	PLD-11916

1) 上段は1 σ , 下段は2 σ の誤差。2) 括弧内の値は ^{14}C 年代の中央値を, 括弧外の値は誤差の両限を較正したものである。

⑤……………考察

伝円珍筆三井寺切紙背『文選注』断簡の較正年代は, 1 σ の誤差範囲で678~771 [cal AD], 2 σ で666~776 [cal AD] という結果であった。

一般の木製文化財の ^{14}C 年代測定において, 測定される較正年代がその資料の制作年代よりも古い値を示す old wood effect という現象がある [例えば, Oda et al., 2004]。原料となった木材の最外年輪が文化財に残されていることは少ない。較正年代は測定した部位の年輪が生育した年代を示すものであるため, 原料木材の最外年輪を測定試料としていない際, 得られる結果は木材の伐採年代よりも古い年代となる。これが old wood effect の主要な原因である。また, もう一つの原因は, 伐採後に長期間保存された木材が文化財の原料として利用された際に, 伐採年代と制作年代との間に年代差が生じるところにある。測定部位の生育年代, 原料木材の伐採年代, 文化財の制作年代の差異が old wood effect の原因となるのである。和紙も楮・雁皮などの低灌木から生産される一種の木製文化財である。しかし, その原料には生育期間の短い枝が利用されること, また長期保存に伴い硬化し墨での筆書に適さなくなる「風邪をひく」現象を起すため生産から消費までの期間が短いことから, 古文書等の old wood effect による年代のずれは数年程度と考えられる。また, 書写年代の既知である古文書・古経典について ^{14}C 年代測定を行った研究例からも, 和紙の old wood effect が小さく, その較正年代は書写年代を含む値となることが示されている [Oda et al., 2000 Oda et al., 2003]。本研究においても, 奈良時代の古写経切 (Sample No. 2~4) について得られた較正年代は, 書写年代を含む値を示している。ゆえに, 伝円珍筆三井寺切料紙の元々の表面に『文選注』本文が書写されたのは, その較正年代が示す7世紀後半から8世紀後半の間であるといえる。

料紙の ^{14}C 年代という自然科学的知見と用筆・字形に関する書跡史的知見とから判断するに, 三井寺切の紙背に残された『文選注』は唐代, もしくは本邦書写ならば奈良時代に書かれたものであると結論付けられる。前述の通り日本に現存する『文選』本文は, 古いものでも平安鎌倉期の残欠本であり, 奈良時代のものとなると正倉院文書や木簡に一部分が写されているのみである。すな

わち、奈良時代以前の年代をもつ本古筆切は、現存する『文選』として最古級の写本の断簡であることになる。

現在、広く流布している『文選』は、宋代の『李善注文選』を底本として嘉慶年間（1796-1820）に胡克家によって重刻された「胡刻本」である。本古筆切に残された『文選注』本文をこの「胡刻本」と比較してみると、「胡刻本」に見られない文言を本古筆切に見出すことができる。本古筆切の三行目からある「漢書曰上左右大臣皆山東人多勸上都雒陽張良曰雒陽非用武之國上即曰西都関中」と六行目からの「社預左氏傳注曰寔實也」の部分（計45文字）が、後の胡刻本では欠落しているのである。

古筆切の中には、同一の物語・歌集などの別の部分が、同質の料紙に書写されたもの、または同じ筆跡・字形、同一の書式（一行の文字数・行間など）で書写されたものが見出されることがある。すなわち、元は同じ本やシリーズを構成していた別の頁（葉）と考えられるものである。これら古筆切をツレという。本研究において対象とした『文選注』断簡のツレと思われるものが、白鶴美術館蔵手鑑に伝傳教大師筆儒書切という名で捺されている〔古筆手鑑大成編集委員会、1984b〕。これを胡刻本と比較すると、先の例とは逆に、伝傳教大師筆儒書切にない10文字が胡刻本に加えられていることがわかる。『文選注』側を表にして貼られているツレとしては、現在この一点を発見したのみであるが、仏書側が表として貼られているツレがMOA美術館蔵「翰墨城」・出光美術館蔵「見努世友」・徳川黎明会蔵「蓬左」・三井文庫蔵「高松帖」などの古筆手鑑に捺されている。

手鑑には伝円珍筆の仏書側が表に貼られていることが多く、裏面になる『文選注』本文を直接見ることはできない。しかしながら、背面の『文選注』が透けて見えるものや、白鶴美術館蔵手鑑のように『文選注』側が表になっているもの、台紙や裏打ちのないいわゆる「まくり」の状態のものも数多く伝世しているはずである。これらを集積し、書写年代を決定することで、散逸してしまった唐代ないし奈良時代の古写本が部分的ではあるが復元できることになり、『文選』の本文整理に関する研究にとって貴重な史料となるものと考えられる。

謝辞

本研究は、国立歴史民俗博物館基盤研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」の一環として実施したものである。また、¹⁴C年代測定を行うにあたって、瀬谷薫氏をはじめ株式会社パレオ・ラボのAMS年代測定グループの皆様には大変お世話になりました。心より感謝いたします。

参考文献

- 古筆手鑑大成編集委員会編（1984a）『古筆手鑑大成2手鑑 白鶴美術館蔵』、角川書店、126-127。
古筆手鑑大成編集委員会編（1984b）『古筆手鑑大成2手鑑 白鶴美術館蔵』、角川書店、114-115。
Oda, H., Yoshizawa, Y., Nakamura, T. and Fujita, K. (2000) AMS radiocarbon dating of ancient Japanese sutras. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B. 172, 736-740.
Oda, H., Masuda, T., Niu, E. and Nakamura, T. (2003) AMS radiocarbon dating of ancient Japanese documents of known age. Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry 255 (2) 375-379.
Oda, H., Nakamura, T. and Tsukamoto, T. (2004) Radiocarbon dating of the sutra container excavated at Minagi

-
- Daibutsuyama site, Fukuoka Prefecture, Japan. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 223-224, 686-690.
- Oda, H., Ikeda, K., Nakamura, T. (2007) Radiocarbon age of the kohitsugire calligraphy and the kiwamefuda certificate. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 259, 374-377.
- Reimer P. J., Baillie M. G. L., Bard E., Bayliss A., Beck J. W., Bertrand C. J. H., Blackwell P. G., Buck C. E., Burr G. S., Cutler K. B., Damon P. E., Edwards R. L., Fairbanks R. G., Friedrich M., Guilderson T. P., Hogg A. G., Hughen K. A., Kromer B., McCormac G., Manning S., Bronk Ramsey C., Reimer R. W., Remmele S., Southon J. R., Stuiver M., Talamo S., Taylor F. W., van der Plicht J., Weyhenmeyer C. E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46 (3), 1029-1058.
- 東野治之(1977a)「平城宮出土木簡所見の『文選』李善注」『正倉院文書と木簡の研究』塙書房, 149-153.
- 東野治之(1977b)「奈良時代における『文選』の普及」『正倉院文書と木簡の研究』塙書房, 189-224.
- 安 裕明(2007)古鈔本文選卷一断簡(三井寺切紙背)の現状. 相川鐵崖古稀記念書学論文集編集委員会編『相川鐵崖古稀記念書学論文集』木耳社, 312-323.

小田寛貴(名古屋大学年代測定総合研究センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

安 裕明(茨城県立多賀高等学校)

池田和臣(中央大学文学部)

坂本 稔(国立歴史民俗博物館研究部)

(2011年7月14日受付, 2011年9月30日審査終了)

Radiocarbon Age of Miidera-gire Attributed to Enchin and the Historical Period when an Ancient Monzen-chu Manuscript was Written

ODA Hirotaka, YASU Hiroaki, IKEDA Kazuomi and SAKAMOTO Minoru

Miidera-gire is an ancient Japanese paper sheet with different calligraphies on both sides. On one side, a part of a Buddhist scripture has been written in cursive hand of Heian period (about 9th–12th century). The other side has a part of Monzen-chu (an anthology of Chinese literary works). The paleographical style of Monzen-chu seemed to be older than that of the Buddhist scripture and was similar to some Chinese manuscripts written in the Tang Dynasty (AD 618–907). However, amid these elegant calligraphies, many copies and counterfeits written several centuries later are in circulation. We, therefore, measured the radiocarbon age of Miidera-gire by accelerator mass spectrometry. The calibrated radiocarbon age indicated 666–776 [cal AD] (2σ error). It concluded that the Monzen-chu was written first on the obverse side, and the Buddhist scripture was written on the reverse side long afterwards. Because only a few incomplete books of Monzen written from the 9th century onwards remain, this calligraphy is one of the oldest examples among the extant manuscripts of Monzen.

Key words: Miidera-gire, Monzen, Ancient Japanese paper sheet, Radiocarbon age